

忠兵衛  
川 冥途の飛脚

近松門 左衛門 作

地 濠標難波に咲くや此の花の。里は三筋に  
町の名も佐渡と越後の間の手を、通ふ千鳥  
の淡路町龜屋の世繼忠兵衛。今年二十の上  
はまだ四年以前に大和より。數銀持つて養  
子分後家妙閑の介抱ゆる。商賣功者駄荷積  
り江戸へも上下三度笠。茶の湯併諧基雙六  
フシ延紙に書く手の角とれて。地酒も三つ  
四つ五つ所紋羽二重も出す入らず。無地の  
丸罽象眼の國細工には稀男。色のわけ知り  
里知りて暮れるを待たず飛ぶ足の。飛脚宿  
の忙しさ荷を造るやら解くやら。手代は帳  
面算盤を奥口ともにどやくと。千萬兩の  
遣繰も筑紫吾妻の取造も。居ながら金の白  
由さは。一步小判や白銀に、フシ翼のあるが  
如くなり。地町廻りの狀取立歸つてそれを  
れと。留帳つくる所へ誰を頼まう忠兵衛宿

にゐやるかと。案内するは出入の屋敷の  
侍。手代ども慇懃に。ヤア是は甚内様。  
忠兵衛は留守なればお下し物の御用なら  
ば。私に仰せ聞けられませ。お茶持ておじ  
やとあひしらふ。いやく下りの用はなし。  
江戸若旦那より御狀が来た。これお聞きや  
れと押開き。來月二日出の三度に金子三百  
兩差上せ申すべく候。九日十日兩日の中其  
の地龜屋忠兵衛方より。右三百兩請取り内  
内申置き候事ども埒明け申さるべく候。則  
ち飛脚の請取證文此の度上せ候間。金子請  
取次第此の證文忠兵衛に渡し申さるべく  
候。地是此の通り仰下された。今日迄届か  
ぬ故大事の御用手管が違ふ。なぜ斯様に不  
埒なとフシ鼻を。しかめて言ひければ。地  
ハ、御尤々々。さりながら此の中の雨續き。

川々に水が出ますれば道中に日がこみ。金  
の届かぬのみならず手前も大分の損銀。地  
若し盜賊か切取か道からふつと出來心。萬  
萬貫目取られても十八軒の飛脚宿から辨へ  
芥子程も御損かけませぬお氣遣あられな  
と。言はせも果てずこれさこれさ。地言ふ  
迄もない御損かけては忠兵衛が首が飛ぶ。  
日限延びては御用の間があくにより。地そ  
れ故の穿鑿迎ひ飛脚を遣して。早速に持參  
せいと徒士若黨も刀の威光。銀拵へも胡散  
なるフシ訛り散らして歸りしが。地又頼み  
ませう。中の島の丹波屋八右衛門から  
來ました。江戸小舟町米問屋の爲替銀。添  
狀は届いたが銀はなぜ届きませぬ。此の中  
文を進じても返事もござらず。使をやれば  
酢の麹蕪の何時届けさつしやるぞ。地此  
の者に渡して人をつけて下され。手形戻そ  
と申さるゝサア。金子請取らうと立ちはだ  
かつて喚きける。主思ひの手代の伊兵衛騒  
がぬ體にて。地これお使。八右衛門様が其

のやうに理窟くさい口上はあるまい。五千兩七千兩の金を預つて。百三十里を家にし江戸大阪を。廣う狭うする龜屋。地そこ一軒ではあるまいし遅い事もなうては。今でも旦那歸られたらば此の方から返事せう。五十兩に足らぬ金あた噓しう言ふまいと。かさから出れば氣を吞まれ、フッ使は眞面目に歸りけり。地母妙閑は炬燵の側離る事も納戸を出で。アア今のは何ぞ。丹波屋の金の届いたは慥か十日も以前の事。なぜ忠兵衛は渡さぬの。今朝から二軒三軒の金の催促聞いて居る。地親父の代から此の家に金一匁催促得ず。終に仲間へ難儀をかけず十八軒の飛脚屋の。鑑と言はれた此の龜屋。皆は心も付かぬか。忠兵衛が此の頃の素振がどうも呑込まぬ。昨今の者は知るまいが地體是の實子でなし。もとは大和新口村。勝木孫右衛門といふ大百姓の一人子。地母御前はお死にやつて繼母がかりの自棄に。悪性狂も出来るぞと父御前の

思案でこれの世取に貰ひしが。世帯廻り商賈事何に愚かは無けれども。此の頃はそはく〜と何も手に付かぬと見た。意見のした事あれど養子の母も繼母も。同然と思はうかせはく言ふより言はぬ身を。恥入らせうと思つて目をねぶつても聞き所。見所は見てゐる。いつの間にやら大氣になり。延の鼻紙二枚三枚手に當り次第。重ねながら鼻かみやる。過ぎ逝かれし親父の話に。鼻紙びんびと使ふ者は曲者ぢやと言はれたが。忠兵衛が内を出さまに延紙三折つて入れて出で。何程鼻をかむやら戻りには一枚も残らぬ。身が達者なの若いのとてあの様に鼻かんで、どこぞで病も出ませうとフシよまひ言して入りければ。地丁稚小者も笑止がり早う歸つて下されかした。待つ日も西の戻り足オツリ店鎖しへ頃に成りにけりフシ駕籠の鳥なる。地梅川に焦れて通ふ廓雀。忠兵衛はとほく〜と外の工面内の首尾。心は蜘蛛手かくなわや十文色も出て来る

は。南無三寶日が暮れると足を空に立歸り。門口には着きけれども留守の内に方々の催促妙閑の耳に入つては如何様の。首尾になつたも氣遣はし誰ぞ出よかし内證を。とくと聞いて入り度しと我が家ながら敷居高く。内を覗けば飯炊のまんめが酒屋へ行く體なり。彼奴は木で鼻もぎど者只是言ふまじ濡れかけて。騙して問はんと思案する間によつと出る。樽持つた手を確としむればあれ旦那様のと聲立つる。アア、露いこりや粹め。俺が首だけなづんでゐる。思ひ内であれば色外に現る。地目つきをそちも見て取つたか可愛らしい顔付で。氣の毒からすはどうぢやいやい。フッ奪を殺せと抱付けば。アア、噓つかんせ毎日々々新町通ひ。のべの鼻紙二折三折。結構な鼻をかまんすもの。なんの私等に手洩もかみたくあるまい。地の噓つきがと振切るを又抱付いて。其方に噓ついて何の徳。實ぢやく〜と言ひければ。それが定なら晩に寝

所へござんすか。地ヲ、成る程く忝い。

それについて今ちよつと問ふ事ありといひ

けれども。それも寢所でしつほりと聞きま

せう必ず騙しにさんすなえ。そんなら私は

お湯沸いて。腰湯して待ちますと、フ言ひ

捨て振切り走りけり。地 忠兵衛うそ腹立ち

煩ひてゐる所に。北の町からいかつげに來

るは誰ぢや。地 ヤア、中の島の八右衛門。

地 彼奴に逢うてはむつかしと。東の方へ出

違へばこれ忠兵衛。外すまいくと聲かけ

られ。地 ヤ八右衛門此の中は久しい。昨日

も今日も一昨日も。人やろくと思つて何

やかやと延引した。地 目切と寒いが親父の

疝氣は婆様の齧齒は。ア、いかう酒臭い過

しやるなく。明日は早々人やらうやれそ

が言傳したぞや。近日一座致し度いとたく

しかくれば八右衛門。地 おけやい。口三味

線に乗せかけても乗る様な男でない。そち

が商賣は三度でないか。身が方へ上つた江

戸爲替の五十兩は何として届けぬ。五日三

日は料簡もあるぞかし。心易いは格別高敷

賃かくからは大事の家職。十日に餘れど埒

明かず今日も使をやつたれば。手代めが嵩

高な返事した。よもや脇へはさうあるまい

八右衛門をなぶるか。地 北濱親中の島天満

の市の側迄。親爺とも言はるゝ八右衛門。

なぶつてよくばなぶられうが金は今日請取

る。但し仲間へこたへうか先づお袋に逢は

うと。内へ入るを引止めさりとは誤つ

た。これ手を合すたつた一言聞いてたも。

拜むくと叫ば又口先で濟さうや。地 梅

川をだましたと男の意氣は違うた。言ふ事

あらばさあ聞かうと。地 ながくしくきめ

つけられ。これ其の聲を母が聞けば死んで

も一分立たぬ事。一生の御恩ぞざりとては

面目ないと、フシはらくと泣きけるが。地

何を隠さう此の金は十四日以前に上りし

が。知つての通り梅川が田舎客。地 金づく

めにて張合かける。此方は母手代の目を忍

んで。僅か二百目三百目のへつり金。地 追

ひ倒されて生きた心もせぬ所に。請出す談

合極つて手を打たぬばかりといふ。川が歎

き我等が一分既に心中する筈で。互の喉へ

脇差のひいやりと迄したれども。死なぬ時

節かいろくの邪魔ついで。其の夜は泣い

て引分れ明ければ當月十二日。其方へ渡る

江戸金がふらりと上るを何かなしに。懷に

押込んで新町迄一敷に。どう飛んだやら覺

えばこそ段々宿を頼んで。田舎客の談合破

らせ此方へ根引の相談締め。彼の五十兩手

附に渡しまんまと川を取留めしも。八右衛

門といふ男を友達に持ちし故と。心の中で

は朝晩に北に向ひて拜むぞや。さりながら

如何に懸なればとて。先に断り立て置い

て使へば借るも同然。跡では如何と思ふう

ち其方からは催促。嘘に嘘が重つて初手の

誠も虚言となれば。今何を言つても誠には

思はれじ。されども遅うて四五日中外の金

も上る筈。如何やうとも仕送つて。一錢一

字損かけまじ此の忠兵衛を人と思へば腹

も立つ。犬の命を助けたと思つて料簡頼み入る。是を思へば世の中に處刑者の絶えぬも道理。此の上は忠兵衛も盗みせうより外はなし。男の口から斯様の事言はれうものか推量あれ。喉より劍を吐くとて是程にはあるまじとスエテ絞り。泣きにぞ泣きゐたる。地鬼とも組まん八右衛門ほろりと涙ぐみ。言ひにくい事よう言つた。丹波屋の八右衛門男ぢや料簡して待つてやる。首尾ようせよと言ひければ忠兵衛土に額を着け。忝い／＼父二人母三人。親は五人持つたれども其の恩よりは八右衛門。貴殿の御恩忘れぬと、フシとかうは涙ばかりなり。地さう思へば満足サア人も見る其の中と。立別れんとせし所に内より母の聲として。ヤア八右衛門様か忠兵衛はへ通しましやと。聲かけられて詮方なくオタリもぢ／＼連立ち入りにけり。母は律儀一遍に。先程はお使又御自身の御出で御尤々々。此れ彼方の金の届いたは十日も以前何として

延引ぞ。胸にとつくと手を置いてよう思案して見や。遅う届けば飛脚は入らぬ。何が其方の商賣ぞ。地サア今渡して上げましやと言へども渡す金はなし。八右衛門も底意は聞くこれお袋。恥かしながら八右衛門が五十兩や七十兩。急に入る事もなし是より直に長堀迄参れば。明日でもと立たんとすればいや／＼。大事のお金預れば氣遣で夜も寝られず。地なう忠兵衛きり／＼渡しやとせり立てられあつと言ふより納戸に入り。うろ／＼しても金はなし入れもせぬ戸棚の錠。あける顔してびんといふ。フシ鍵の手前も恥かしく。地胸に願立て神おろし狂氣の如く氣を揉みしが。ヤレ有難や此の櫛箱に焼物の鬚水入。これ氏神と三度頂き紙押廣げくる／＼と。駿河包に手ばしこく金五十兩墨黒に。似せも似せたり五十杯。母には一杯参らせし。フシ其の悪智恵ぞ勿體なき。此これ八右衛門殿。今渡さいでもすむ金ながら母の心を休める爲。地男を立

てる其方と見て詮方なう渡す金。さつぱりと請取つて母の心を休めてたも。包は解くに及ぶまじいらうて見ても五十兩。どうしてたもると差出す八右衛門手に取つて。ハテ誰ぞと思ふ丹波屋の八右衛門。請取るに仔細はないこれお袋。江戸爲替儘に請取りました。地不動参りに待ちますると立つ所を妙閑誠と思ひてやこれ忠兵衛。仕切爲替の作法は金と手形と引替へ。若し御持参なきならば一筆ちよつと書かせましや。地物は念ぢやと言ひければ。ヲ、それ／＼母は無筆の一字も讀まれねども。しるしばかりに一筆と覗出して目くばせすれば。易い事易い事忠兵衛文言これ見やと。筆に任せて書き散らす。一つ金子五十兩請取申さず候。右約束の通り晩には廓で飲みかけ。我等は辨問實正明白なり。何時なりとも驢の節きつと参上申すべく候。地依つて紋日の爲鬚水入件の如しと。阿呆のたら／＼書き散らしさらばお暇申さうと。表へ

出づれば妙閑は書いた物こそ物言へど。又だまされし正直の親の心や佛の顔も。三度飛脚の江戸の左右、フシ待つ夜もやうく更けにけり。地表に馬の鈴の音こりやく更荷が着いたぞ。中戸々と聲高に手んでに葛籠かたけ込む。忠兵衛親子機嫌よくサア拍子が直つた來年も仕合馬。馬子衆に酒よ煙草よと。硯扣へつ帳付けて、フシ家内どんどと賑へば。手代の伊兵衛けうとけに。調なう堂島のお屋敷から。金三百兩九日に來る筈前狀が上つた。何とて遅いとお侍の甚内殿が。睨め付けて歸られた何とくと言ひければ。地宰領が打飼より其の三百兩合點。是急々の御用今夜中にお届け。方々の爲替金高八百兩ぐわらりくと取出す。忠兵衛愈勢よく白銀は内庫へ。金子は戸棚へ母者人私は直に此の小判。お屋敷へ持參する人の金を預れば。表も氣を付け早う締め火の用心が一大事。戻りはちつと遅うても籠籠で行けば氣遣ない。夜食しまうて早

や寢よと金懐中に羽織の紐。結ぶ霜夜の門の口出なれし足の癖になり。心は北へ行くくと思ひながらも身は南。西横堀をうかくと氣にしみ付きし妓が事。米屋町迄歩み來てヤア。是は堂島のお屋敷へ行く筈。狐がばかすか南無三寶と引返ししがム、我知らずこゝ迄來たは。地梅川が用あつて氏神のお誘ひ。一寸寄つて顔を見てからと。立歸つてはいや大事。此の金持つては遣ひたからうおいでくれうか。往つてのけうか地カ、リ往きもせいと。一度は思案二度は不思案三度飛脚。戻れば合せて六道の冥途の飛脚と三重

中之卷

がしるべして。橋がかけたや佐渡屋町越後は女主人として。立寄る妓も氣兼ねず底意残さぬ。フシ戀の淵。地身の憂きしほで梅川もこゝを思ひの定宿と。餘所の勤めもかきの本。フシ島屋をちよつと島がくれ。調申しきよさん。今日は島屋で彼の田舎のうてすに。せびらかされて頭が痛い。忠様はまだ見えぬかえ。地せめての所縁にこなさんの顔が見たさに貸しに來たと。入るさの門の障子戸もフシ明るるあしたの形見かや。さつてもようござんしたあれ二階にも女郎様達が大勢遊びにござんしてお客待つ間の酒事。拳をしてござんするこなさんもお氣晴しに。一拳して酒一つ傍輩様もござんすと。地上る二階の隙間風男父せずの火鉢酒。拳の手品の手もたゆく。調ろませさい。とうらい。さんな。地同じ事とよ豊川に。聲の高瀬がさす腕には。はま。さんきう。さう。りう。すむゐ。地それくなんと。地體一つは鳴渡瀬様。あれ梅川様のござんした。な

うよい所へ来て下んした。こなさん拳の上  
手。宵から千代歳様に仕付けられて無念な。  
敵取つて下んせ。フシ銚子直しやと言ひけれ  
ば。ア、うたての酒や拳をする氣もあら  
ばこそ。此の梅川が今の身を少しは泣いて  
貰ひたや。田舎の客が身請の事今日も今日  
とて島屋にて。理窟をつめて強請言腹が立  
つやら憎いやら。とは言ひながら是は先。  
忠兵衛様は後手といひ宿の精力一つにて。  
手附も渡し約束の日限切れるも言ひ延し。  
今日迄は繋がりがりしが忠様も世帯持。養子の  
母御の手前といひ屋敷方歴々の。町方を引  
受けて東路かけての大事の商賣。如何なる  
事が邪魔になり田舎の客に請けられては。  
我が身一つは死んでも退けう天神太夫の身  
でもなし。さもししい金に氣がふれた見世女  
郎のあさましさと。世間の唱へ傍輩の掃部  
殿を始めとして。格子女郎衆の手前もあり。  
忠様と本意を違けとやかう人に謠はれし。  
面が脱ぎ度うござんすと。フシ泣きし。づ

きて語るにぞ。地一座の女郎身の上に。思  
ひ合せて尤と。フシつれて涙を流せしが。  
ア、いかう氣がめいるわつさりと淨瑠璃に  
せまいか。禿どもちよつと往て竹本頼母様  
借つて来い。いやさきに髪附買ふとて聞き  
ました。芝居から直に越後町の扇屋へ行  
かんしたけな。私は頼母様の弟子なればよ  
う似た所を聞かんせサア三味線と夕霧の  
クリ昔をへ今に。フシ引きかけて。傾城に誠  
なすと世の人の申せども。それは皆御事譚  
知らずの言葉ぞや。誠も嘘も。フシ元一つ。  
増たとへば命抛ち如何に誠を盡しても。男  
の方より便なく遠さかる其の時は心やたけ  
に患ひても。かうした身なれば。フシまゝな  
らず。地自ら思はぬ花の根引にあひ。か  
けし誓も嘘となり。又初めより偽りの動ば  
かりに逢ふ人も絶えず重ねる色衣つひの寄  
るべとなる時は。始の嘘も皆誠とかく只戀  
路には偽りもなく誠もなし。縁のあるのが  
フシ誠ぞや。逢逢ふ事叶はぬ男をば思ひく

て思ひが積り。思ひがめにもさむるもの  
エテつらや所在と恨むらん。地恨まば恨めい  
としいといふ此の病。勤めする身の持病か  
と。戀に浮世を投首の。フシ酒も。しらけて  
醒めにけり。地中の島の八右衛門九軒の方  
より淨瑠璃聞付け。ヤア皆聞知つた妓の聲  
聲花車内にかとつと入り。柄差簪逆手に  
取り二階の下から板敷を。ぐわたくと  
突き鳴らし。地女郎衆あんまりぢやこゝに  
も人が聞いてゐる。いかなる男でそれ程に  
戀しいぞ。男が無うて淋しくばお氣に入ら  
ずと。是にも一人貸してやろかと喚きける。  
地梅川はそれとも知らずデモ逢ひ度いが定  
ぢやもの。憎いなら来て叩かんせ。地きよ  
様下は誰さんぢや。イヤ大事ござんせぬ中  
の島の八様と。地聞くより梅川はつとして  
これく彼のさんには逢ひともない。皆様  
下りて下さんせ私が二階に居る事を。必ず  
く言ふまいぞ。そこらは粹ぢやと打領き  
オトリ皆々座敷に出でければ。地ヤア千代

飛の途

6

歳様噴渡瀬様。歴々の御参會。梅川殿は背の口島屋を貰うて往なれたけな。忠兵衛もまだ見えそもない。花車や爰へ寄らつしやれ。地女郎衆も禿ども忠兵衛が事につき。耳打つて置く事がある爰へくゝとひそくすれば。ハア、何事やら氣遣なといへども二階の梅川に。悪い噂も聞かせんかとフシ皆氣を配る折節に。地忠兵衛は世を忍ぶ心の氷三百兩。身も懐も冷ゆる夜に越後屋に走着き。内を覗けば八右衛門横座をしめて我が評判。はつと驚き立聞きす二階には梅川が。心をすます壁に耳フシ漏るゝぞ仇のはじめなる。地斯くと知らねば八右衛門。調かう言へば忠兵衛を憎み猜むやうなれど。居味みぞあの男が身の成る果がかはい。尤千兩二千兩。人の金をことづかり暫時の宿を貸すけれども。手金とては家屋敷家財かけて十五貫目。廿貫目に足らぬ身代。大和の親が長者でも。龜屋へ養子に越すからは高の知れた百姓かういふ此の八右衛門も

若い者の習ひ。一年に五百目一貫目揚屋の座敷も踏まねばならぬ。身にも應ぜぬ忠兵衛が梅川に上りつめ。島屋の客と張合ひ五月より以來大方は揚詰。身請も此の頃極り。百六十兩の内五十兩手附渡したけな。地それ故に方々の届け金が不埒になり。當る所が嘘八百いかう小尻が詰つて來た。今でも梅川がサア出るに極らば。借錢もあらうし泣いても二百五十兩。天から降らうか地から湧かうか。盗みせうより外はない。彼の手附の五十兩何處から出たと思召す。自身の方へ來る江戸爲替中で取つて違うたを。それとも知らず請ひに行き養子の母御がいとしばや。上つたは知つてなり渡せくとせつかれて。忠兵衛が戻した小判お目にかけうかと。一包取出し。コレかう見た所は五十兩。地さらば正體あらはして獄門の種御覽あれと。包を切つて切りほどけば焼物の疑水入主も一座の女郎もはあゝとばかりに怖氣たち。身を縮むれば二階には。顔を

疊に摺り着けてフシ聲を隠して泣き居たり。地短氣は損氣の忠兵衛傾城は公界者。五十兩のめくさり金取替へた僧上。若い者に恥かゝせ川が聞いたら死にたかろ懐の三百兩五十兩引抜いて。面へぶち付け存分言ひ我が身の一分川が面目。雪いでやらうア、されども是は武士の金。殊に急用。地茲が大事の堪忍と。手を懐へ幾度かとやせんかうやししようけ鳥。鶉の嘴の齧ふ。フシ心を知らぬぞ是非もなき。地八右衛門水入取上げ。これと實はば十八文。如何に相場が安いとて五十兩を二分五厘替へ。神武以來無い事。友達さへこれなれば他人を騙るは御推量。此の次は段々に巾着きりから家尻きり。果ては首切り如何にしても笑止な。地あの如くに亂れては主親の勘當も。釋迦達磨の意見でも聖徳太子が直に教化なされても。いかなく直らぬ廓で此の沙汰ばつとして。寄せ付けぬやうに頼みます。梅川殿へも吹込んで此方から挨拶切り。島屋の客に

さらりつと請けさせて了ひ度い。皆あの流  
が心中か女郎の衣裳を盗むか。ろくな事は  
出かす片小髻剃りこほされ。大門口に曝  
され友達の一分すてさする。人でなしとは  
彼が事。可愛ゆくば寄せて下さるなと語る  
を聞けば梅川も。悲しいといとしいと身の  
果敢なさとかきませて。胸ひき裂ける忍び  
泣きア、及物がな鉄でも。舌を切つても死  
に度いとスエテ悶え伏したる苦みを。地した。  
には各推量してひよんな心にならんした運  
の悪い梅川様。いとしいは川様お一人に  
止めた。下女御料理人うら若き。フシ禿  
も袖を絞りけり。地 忠兵衛元來悪い蟲押へ  
兼ねてすんと出で。八右衛門が膝にむんず  
と居か、り。これ丹波屋の八右衛門殿。  
常々の口ほどあつてテ、男ぢや見事ぢや。  
三人寄れば公界忠兵衛が身代の棚下してく  
れる忝い。コリヤ此の水入も男同士。母の  
心を休めるため受取つてくれるかと。謎を  
かけて渡したを此の忠兵衛が五十兩。損か

けうかと氣遣さに廓三界披露して。男の一  
分すてさする。但し又島屋の客に賄賂取り  
て。梅川に藥を焚きあちらへやらうといふ  
事か。措いてくれ氣遣すな五十兩百兩。友  
達に損かける忠兵衛ではごあらぬア、八  
右衛門様八右衛門め。地 サア金渡す手形戻  
せと。金取出し包を解かんとする所を。八  
右衛門押へてこりや待てやい忠兵衛。調餘  
程のたはけを盡せ。其の心を知つたる故意  
見をしても聞くまじと。廓の業を頼んで此  
方から除けてもらうたらば。根性も取直し  
人間にもならうかと。男づくの懇だけ。  
五十兩が惜しければ母御の前で言ふわいや  
い。戲謔な手形を書き無筆の母御を宥めし  
が。是でも八右衛門が届かぬか。其の金高  
も三百兩手金のあらうやうもなし。地 定め  
て何處ぞの仕切金。其の金に疵をつけ。八右  
衛門したやうに髪水入では濟むまいぞ。但  
し代りに首やるか逆上りつめる其の手間

ぬ氣遣ひ者と。割つつ碎いつ叱れどもいや  
く仁義だて措いてくれ。此の金を餘所  
のとは此の忠兵衛が三百兩持つまいもの  
か。地 女郎衆の前といひ身代を見立てられ。  
猶返さねば一分立たぬと。包ほどいて十二  
三十。始終つまらぬ五十兩くるくると引  
つ包み。これ地屋忠兵衛が人に損かけぬ證  
據。サア請取れと投付くる男の面へ何とす  
る。忝いと禮いうて返し直せと地 投展す。  
己れに何の禮言はうと。又投付けつ投返し  
フ腕まくりしてぎしみ合ふ。地 梅川涙にく  
れながら梯子かけ下りなうすつきり私が開  
きました。皆島八様のがお道理ぢやこれ手  
を合せる。梅川に免して下さんせとフシ聲  
を。あけて泣きけるが。地 情なや忠兵衛様  
なせその様に逆上らんす。そもや廓へ来る  
人のたとへ持丸長者でも金に詰るはフシあ  
る習ひ。地 此處の恥は恥ならず何をあてに  
人の金。封を切つて撒散し詮議にあうて宇  
櫃の。繩かゝるといふ恥と此の恥と換へ



らるか。恥かくばかりか梅川は何となれといふ事ぞ。とつく心を落しつけ八様に詫言し。金を束ねて其の主へ早う届けて下さんせ。私を人手にやりともないそれは此の身も同じ事。身一つ捨てると思ふたら皆胸にこめてゐる。年とてもまあ二年下宮島へも身を仕切り。大阪の濱に立つてもこな様一人は養うて。男に憂き日かけまいもの氣を鎮めて下さんせ。あさましい氣にならんした斯うは誰がした私がした。皆梅川が故なれば忝いやらいとしいやら。心を推して下さんせと。口説き立てく小判の上にはらくくとツツ涙は。井出の山ぶ。きに露置き。添ふる如くなり。地忠兵衛氣も有頂天。前後括らぬ間に合ひ建敷金の事思出し。思はて喧しい。此の忠兵衛をそれ程たはげと思やるか。此の金は氣遣ない八右衛門も知つて居る。養子に来る時大和から。敷金に持つて来て餘所へ預け置いた金。地身請の爲に取戻した花車迄へと呼び寄せ。先へ手付

に五十兩。今百十兩合せて百六十兩。是川が身の代これ又四十五兩。いづぞやしめた帳面買ひがかりの借錢。五兩は遣手九月からの揚錢。萬事十五兩程と覺えたが。算用がやかましい廿兩で帳消しや。此の十兩は此方へ御祝儀やら骨折ぶん。りんも玉も五兵衛も壹兩づつぢや来いくと。金錢降らす都那のツツ夢の間の榮耀なり。地サア今の間に埒明け今宵の中に出るやうに。頼むくと言ひければ主俄に勇みをなし。無い程は無いも金有る段には有る物かは。氣を死なさう事でない。川様嬉しう思はんしよ。ヤ大事の金を持つて行く。りんも玉も供しやとツツ引連れ走り出でにけり。地八右衛門は濟まぬ顔誠とは思はねども。只さへもらふ此の小判返す物をいはれぬ辭儀。五十兩儘に請取つた手形を返すと投出し。梅川殿よい男持つてお仕合。妓達これにと地金懐中し出でければ。私等もいざ歸りましょ。川様目出たうござんすとオツリ皆宿へ宿へぞ歸りける。地忠兵衛氣を急いで花車はなぜ遅いぞ。五兵衛行つてせつてくれと立ちに立つてせきけれども。地イヤ身請の衆は親方がすんでから。宿老殿で判を消し。月行事から札取らねば大門が出られませぬ。まちつと隙が入りませう。地エ、そこらを早うこりや頼むと。又一兩投出すおつとまかせと足軽く。走る三里の灸よりも小判の利きぞ應へける。地サアく此の間に身拵へべたくした取りなり。帶もきりりと仕直しやとめつたに急げば何ぞいの。一代の外聞傍輩衆へも孟事。暇もわけようしてゆるりと出して下さんせと。何心なく勇む顔男はわつと泣出し。いとしや何も知らずか今の小判は堂島の。お屋敷の急用金此の金を散らしては。身の大事は知れた事随分堪へて見つれども。友女郎の真中で可愛い男が恥辱を取り。其方の心の無念さを晴し度いと思ふより。ふつと金に手をかけてもう引かれぬは男の役。かうなる因

果と思つても。八右衛門が面付直に母に

ぬかす顔。十八軒の仲間から詮議に来るは

今の事。地獄の上の一足飛び飛んでもたも

とばかりにてッシ縫り。付いて泣きければ。

梅川はあと慄ひ出し、ッシ聲も涙にわな

／＼と。それ見さんせ常々から言ひしは

茲の事。なぜに命が惜しいぞ二人死ぬれば

本望。今とても易い事分別据ゑて下んせな

う。■ヤレ命生きようと思つて此の大事が

成るものか。生きらるゝだけ添はるゝだけ

高は死ぬると覺悟しや。■ア、さうぢや生

きらるゝだけ此の世で添はう。今にも人が

来るため此處へ隠れてござんせと。屏風の

陰に押入れア、私が大事の守を。内の簾筒

に置いて来た是が欲しいと言ひければ。■

ハテかゝる悪事を仕出して。如何な守の力

にも此の科が遅れうか。■鬼角死身と合點

して我は其方の回向せん。其方は此の忠兵

衛が回向を頼むと屏風の上。顔を出せばハ

下さんせいやな物によう似たと。屏風にひ

しと抱き付き、ッシむせ返り。てぞ歎きける。

地越後主従立歸りサア、どこもか埒明いた。

お出の勝手近ければ西口へ札が廻つたと。

言へども夫婦はわな／＼とさらば／＼も顛

ひ聲。お寒さうなが酒わいの。酒も咽喉を

通りませぬ。目出たいと申さうかお名残惜

しいと申さうか。千日言つても盡きぬ事其

の千日が迷惑と。ゆふづけ鳥に別れ行く榮

耀榮華も人の金。果は砂場を打過ぎて。跡

は野となれ大和路や足に。任せて。■

忠兵衛相合。■ 駕籠。下之巻

■ 翠帳紅圍に。枕並べし閨の内。馴れし

歌金の夜すがらも。四つ門の跡夢もなし。

さるにても我が夫の。秋より先に必ずと。

仇し。情の世を頼み。人を頼みのチ、ッシ綱

切れて。夜半の中戸も引替へて。人目の關

にせかれ行く昨日の儘の髪つきや。髪の髷

めのほつれたを。スエテわけて進じよと櫛を

足を太股に相合炬燵相興の。駕籠の息杖生

きてまだ。續く命が、ッシ不思議ぞと二人が

涙。河堀口。■ 地明けぬ間は暫しとて。駕籠

の躰をあけてさへ膝組み交す駕籠の内、秋き

局のありし夜の。途瀬に似たは似たれども

ッシ炭の埋火いつしかに朝の霜と。置きかへ

て夜半の嵐に呼ばれては。こたふる野邊の

禿松、ホオトクリ過ぎし。其の夜が思はれて。い

とど涙の、ッシ種ならん。■ 地何くど／＼と思

ふぞや。是ぞ一蓮託生と慰めつ又慰みに。

比翼煙管の薄煙オクッリ暮も、絶えん、晴れ渡

り。麥の葉生に風荒れて朝出の賤や火を賣

ふ。野守が見る目恥かしと。駕籠立てさせ

て暇をやる。値の露も命さへ惜しからぬ身

は、惜しからず猶も惜しまぬ徒歩跣足。ッシ

惜むは名残ばかりぞや。■ 歌終に着馴れぬ綿

帽子。私が顔よりこなさんの。肌これを

と風防ぐびり帽子の紫や。色で逢ひしは

早や昔。今日は眞身の女夫合。頼まば願ッシ

勝鬘の愛染。様に愛敬を。祈る芝居の子供

衆や。道頓堀の色々や馴れし廓の夫どとは。

紋で覺えし提燈の中に果敢なや槌屋内。此

の木瓜に打添ひて私が紋の松皮の。松の千

歳を祈りしに。定めぬ契提燈のオクリ消ゆる。

命の夕には此の紋付けて我が中の。フシ經

帷子と觀念し。地冥途の道を此の様に手を

引かうぞや引かれうと。又取交し泣く涙袖

の氷と閉ぢあへり。誰が關据ゑぬ道なれど

問ひ問ひ行けばはか行かず。今朝の姿をそ

のなりに素足に雪踏しむづけば。空に雲の

一疊り霞交りに吹く木の葉ハヰひらり。平

野にフシ行きかゝり。こゝは知る人。多け

れば。こちへくと袖覆ひ。里の裏道畦道

をセツリすぢりもぢりてフシ藤井寺。あれ

くあれを見やどこの田舎も戀の世や背門

に菜を摘む十七八が歌門に立つたは忍びの

失かえ。野風身の毒こち這入らしやんせえ

餘所の眩言。フシ映しく地それ覺えてかいつ

の事。彼の初雪の朝込に。寝衣ながらに送

られし大門口の薄雪も今降る雪も變らね

ど。フシ變り果てたる身の行方。我ゆる染め

て。いとほしや元の白地を淺黄より。戀は

譽田の八幡に起請誓紙の筆の罰。其方を除

けてと泣く涙。暫し。人目の引。許しは

あれど。申しこれなうさりとては我が身と

てもまゝにはと末は涙に果しなくオクリ延紙

の。三つ折。地絞るにも裾にやつる。フシ小

笹原。霜に枯野の薄原茫。茫。さらく

さつと鳴つたは我を追手の尋ぬるよと。覆

ひかさなり影かくしふりさけ見れば人には

あらで。妻戀ひ鳥の羽音に怖ぢる身となる

は。如何なる罪の。報どと。フシ口説き欺き

て。行く姿泣くか笑ふか富田林の群鴉。

せめて一夜の心なく。長。咎むる聲の高間

山あの葛城の神ならで晝の通ひ路つゝまし

く。身を忍ぶ道戀の道。われ。から狭き浮

世の道竹の内峠袖濡れて。岩屋越とて石

道や野越え山暮れ里々越えて行くは戀ゆ

る。三重

澄める世の。フシ校正しく。畿内近國に追

手かゝり中にも大和は生國とて。十七軒の

飛脚問屋或は順禮古手買。節季候に化けて

家々を覗の機關鉛賣と。子供に鉛をねぶら

せて口をむしるや良の鳥。網代の魚の如く

にて。フシ通れがたなき命なり。地無慚やな

忠兵衛我さへ浮世忍ぶ身に。梅川が風俗の

人の目だつを包み兼ね。借駕籠に日を送り

奈良の旅籠屋三輪の茶屋。五日三日夜をあ

かし廿日餘に四十兩。遣ひ果して二歩残る

鐘も霞むや初瀬山。餘所に見捨て、親里の

新口村に着きけるが。これお梅。こゝは

我が生れ在所廿歳迄育つて覺えしが師走の

果に此の如く。諸勸進諸商人春とても無い

事。地あれあそこにも立つてゐる野外れに

も二三人。胸騒ぎもして來た四五町行けば

ほんの親。孫右衛門の家なれども不通とい

ひ繼母なり。此の蕪茸は忠三郎とて下作あ

てた小百姓。腹の中から馴染み頼もしい男

先づこゝへと打連れ。忠三郎宿にか。

久しうお目にかゝらぬと。つつと入れれば鼻はなと思しく誰でござるぞ。此こゝのは今朝から庄屋殿へ詰められ。今は留守で御座るといふ。ム、忠三殿におか様は無かつたが。此方こなたはどれでばしござるぞ。ア、私も三年跡あとにこれの内へ嫁入して。前方まへの知る人はどれがどうも知りませぬ。ヤアほんに皆様は若しや大阪ではござらぬか。これの親方孫右衛門様の繼子忠兵衛殿と申すが。大阪へ養子にいて傾城けいせい買かうて人の金を盗み。其の傾城連れて走られたと云うて。代官殿より御詮議。孫右衛門様はとうに親子の久離を切り。構はぬとは言ひながら眞實の親子なれば。年寄つての氣苦勞きくろうこれの馴染なじみの事なれば。地若ぢわしも此の邊へたうろたへて。見附けられてはいとしい事と内外うちとそとへ氣をつけらるゝ。庄屋殿から呼びに來る寄合の印判の。節季師走に此の在所は傾城事で煮え返る。なううなてのお傾城殿やと、ッシ遠慮もなくぞ語りける。地忠兵衛はつと思ひ如何

にもく、大阪でも其の取沙汰。我等は夫婦連で年籠りに参宮の志。懐しさに寄りましてたちよつと呼ようで來て下され。立ちながら逢あうて歸り度い。地大阪者と言はずに頼みますと言ひければ。扱あはいかうお急いそぎか往いて呼ようで來ませうさり乍ら。鎌田村のお道場へ京のお寺のお下り。毎日のお讚さん歎たん先まから直なにお道場へ。參られたもいさ汁の下。さしくべて下されと、ッシ褌ふんどしがけて走り行く。地跡の門口梅川がはたと鎖かざりして。かかけ。是はほんの敵かたきの中大事ちゆうだいじないかと言ひければ。地忠三郎といふ者は百姓に稀な男氣持こころつた者。地頼たのんで一夜逗留し死ぬるとも此の所。故郷の土に身をなして生みの母の墓所。一所に埋まる嫁姑の未來の對面たいめんさせ度いと。目もろくとなりければそれは嬉うれしうござんせう。さり乍ら私が母は京の六條定めし此の間詮議に人が往きつらん。日頃ひな眩暈めまい持もちなればどうならんした事やら。ま一度京の母様にも一日逢あうて死したいぞ。地ヲ、道理とも我も其方そなたのお袋ふくろに。聲こゑぢやと云うて逢あひ度いと。人目なければ抱かかき合あひ、ッシ涙なみだの。雨の横時雨袖よこときあそびに。餘りて窓を打つ。地ハア、降ふつて來たさうなと西受けの竹たけ欄らん子こ。反古障子はんこしょうじを細目こまめにあけて見やる野風の鳥道うしちみち。後うしろしぶきに降る雨はかたけて急いそぐ阿彌陀傘あみだかさ。道場參り打連れしはあれ皆在所の知つた衆しゆ。先まなは樽井端つづみはたの助三郎是も在所の口利くちりき。あのお婆おばは荷持にぎ瘤りゅうの傳でんが聲こゑ。ア、いかい茶飲ちやくみぢやが其處そのところへ見える制下せいげは。昔は大貧乏。年貢に詰つつて娘を京の島原へ賣り。大盡に請出され奥おく様に供たごり。聲こゑのかけて田も五町倉も二箇所ふたところの分限者。同じ傾城請ける身が我は其方そなたのお袋ふくろに。憂目うれをかける口惜くししい。あの爺おやは弦掛つづみかの藤次兵衛。八十八で一升飯殘いっしょうはんざんさぬ。今年ことしは丁度九十五。其處そこへ來た坊主は鐵立てつたての道庵だいち。あいつが鐵で母ぢや人を立て殺した。思へば母の敵かたきぢやと、ッシ憂うれきにつけての恨み言うらみご。地あれ、あれへ見えるが親父

様。あの親の肩衣が孫右衛門様かほんに目許が似たわいの。それ程能う似た親と子の。言葉をも交されぬ是も親の御罰ぞや。お年も寄る足許も弱つた。今生のお暇と手を合すれば梅川は。見始めの見納め私は嫁でござんする。夫婦は今をも知らぬ命百年の壽命過ぎて後。未來でお目にかゝりましょと口の内にて獨語。諸共に手を合せ、フシ咽び入つてぞ歎きける。孫右衛門は老足の休みく門を過ぎ。野口の溝の水氷たるを止る高足駄。鼻緒は切れて横様に泥田へかかと轉け込んだり。ハア悲しやと忠兵衛もがけども騒けども。身を顧て出もやらす梅川あわて走り出で。抱起して裾絞りとこも痛みはしませぬか。お年寄のおいとしやお足もすゝぎ鼻緒もすけて上げませう。少しも御遠慮なさるゝなど、フシ腰膝撫でて痛はれば。孫右衛門起上り誰方やら有難い。お蔭で怪我も致さぬ。若い上藤のおやさしい年寄と思召し。嫁子もならぬ介抱。寺道

場へ参つてもこれ。この一心が邪見では参らぬも同然。此方がほんの後生願ひもう手を洗うて下され。地幸ひ爰に薬もあり鼻緒は私がすけましょと。懐の塵紙を取り出せば梅川は。好い紙がござんする紙捻拭つて上げませうと。延紙引裂きし其の手許孫右衛門不思議さうに。先づ此方はこゝらに見知らぬお人ぢやが。誰方なれば此のやうに懇にして下さると。顔をつれく眺むれば梅川いとど胸づはらしく。我等は旅の者私が舅の親父様。丁度お前の年配で恰好も其の儘。地外へする奉公とは更更以て思はれず。お年寄つた舅御の臥し惱みの抱きかゝへ。給仕は嫁の役御用に立てば私も。なんほうか嬉しいもの連合はなほ親御の事。飛び立つやうにもある筈此の紙と。此の紙と。換へて私が申し受け連合の肌に付けさせ。父御に似たる親父様の形見にさせたうござんすと。塵紙袖に押包む。

門つくぐと推量し。流石恩愛捨て難く老の涙にくれけるが。此方の舅にこの爺が。似たと言うての孝行か。嬉しいうちに腹が立つ年長けた悴を仔細あつて久離切り大阪へ養子に遣せしに。地根性に魔がさいて大分人の金を通り。擧句に所を走つて此の在所まで詮議の最中。誰ゆゑなれば嫁御ゆゑ。近頃愚痴な事なれども世の豎にいふ通り。送する子は憎からで繩かくる人が恨めしいとは此の事よ。久離切つた親子なれば善いにつけ悪いにつけ。構はぬ事とは、フシ言ひながら。大阪へ養子にいて利發で器用で身を持つて。身代も仕上げたあのやうな子を勘當した。孫右衛門はたけ者阿呆者と言はれても。其の嬉しさは。どうあらう今にも捜し出され。繩かゝつて引かした仕合ぢやと褒められても。其の悲しさはどうあらう今から思ひすござれて。一日も先に往生させて下されと拜み願ふは今

參る如來様御開山。佛に噓はつかぬぞと。土にどうと平伏して、フシ聲を。ばかりに。

泣きければ、梅川も聲をあけ忠兵衛は障子より。手を出し伏拜み。身を揉み歎きし

づみしは、フシ道理とこそ聞えけれ。猶も涙を押しひなう血の筋は悲しい。仲の能い他人より。久離切つた親子の親みは世の習

ひ。盗み騙りをせうよりもなぜ前方に内證で。かうくした傾城にかうした譯の金

が入ると。密かに便宜もするならば親は泣寄り親子なり。殊に母も無い忒。隠居の

田地を賣つても首綱は付けさせまい。今では世間廣うなり養子の母に難儀をかけ。

人に損かけ苦勞をかけ孫右衛門が子で候とて。引込んで置かれうか一夜の宿も貸され

うか。皆彼奴が心から其の身も狭い苦しをる。嫁御に迄憂き目を見せ廣い世界を逃

け隠れ。知音近付親子にも。隠れるやうに身を持ちなしろく死にもせぬやうに。此

の親は生みつけぬ憎い奴とは思へども。可

愛ゆうござるとばかりにてスエチわつと消え入り。泣沈む、フシ分けたる。血筋ぞ哀れな

る。涙の隙に巾着より銀子一枚取出し。これは難波の御坊の御普請の奉加銀。今こ

こに有り合せた嫁御と存じてやるでもなし。只今のお禮のため此の邊にぶらつ

ては。調よう似たとて捕へるぞ連合は猶以て。是を路錢に御所海道へかゝつて一足も

早う退つかしやれ。此方の連合にも言葉こそは交さずとも。ちよつと顔でも見度いが。

いやくそれで世間が立たぬ。どうぞ無事な吉左右をと涙ながら二足三足。行き

ては歸りなんと逢うても大事あるまいかい。なんの人が知りませう通うてやつて

下さんせ。ア、大阪の義理は缺かれまい。どうぞして逆様な回向させなと懇に。頼

みますると咽返り。振返りく、オッリ泣く。別れ、フシ行く跡に。夫婦はわつ

と伏轉びスエチ人目も忘れ。泣きたる。親子の仲こそ果敢なけれ。忠三郎が女房

雨に濡れて立歸り。待遠にござりませう。こちの人は庄屋殿から直に道場へ參られ。

それ故違ひも致さずもう雨も晴れかゝる。追付け今に戻られうといふ處へ忠三郎。息

を切つて販來りこれはく忠兵衛様。親父様の話で段々を聞いて來た。此方の事

此の在所は大阪から間者が入り。代官殿から詮議ある劍の中へ晝日中。運の盡き

たお人ぢや此方の振を見附けたやら。俄在所家並の片端から屋搜し。親父様を今探

すこれから私が家の番。親父様はいとしや早う脱かしてくれよとて。狂亂になつてぢ

や鰯の口とは只今サアく裏道から御所街道山へかゝつて退かつしやれと。言へば夫

婦は狼狽ゆる女房は譯知らず。わしも一所に逃きましょか。阿呆らしいと引退

て。夫婦に古莖古笠や雨のあしべも亂る。心。死しても忘れぬ此の情、フシ深く忍びて

出でにけり。忠三郎先づ嬉しと息をついだる所に。庄屋年寄先に立ち代官所の捕

手の家。忠三郎が門口背門口二手になりど  
やくと込み入つて。薙をまくり篋子を破  
り唐櫃米櫃灰俵打返してぞ探しける。土間  
かけて二十疊にも足らぬ小家。いづくに隠  
れんやうもなし此の家は別條なし。野道を  
探せと言ひ捨てて茶園島の間々をかり立て  
てこそ三疊通りけれ。地親孫右衛門は跳  
足にて。どうぢやう忠三郎善か悪か聞き  
たい。ア、よい氣遣ない。夫婦なが  
ら何事なうまんまと落しました。道場へ  
有難い忝い如來のおかけ直ぐに又。道場へ  
参りて御開山へ御禮申さう。なう嬉しや有  
難やと二人打連れ行く所に。總屋忠兵衛  
棧屋の梅川。地たつた今取られたと北在所  
に人だかり。程なく捕手の役人夫婦を搦め  
て引き來る。孫右衛門は氣を失ひ息も絶ゆ  
るばかりなる。風情を見れば梅川が夫も我  
も繩目の科。眼も眩み泣き沈む忠兵衛大聲  
あけ。自身に罪あれば覺悟の上殺さるゝは  
是非もなし。御回向頼み奉る親の歎きが目

にかゝり。地カ、未來の障これ一つ面を包  
んで下されお情なりと泣きければ。手拭引  
き絞りめんない千鳥百千鳥。泣くは梅川川  
右之本令吟覽頌句音節墨譜  
等不殘毫厘令加筆候可有開  
版者也

竹 本 義 太 夫

竹本

博教

重而予以著述之本令校合候  
畢全可爲正本者歎

近松門左衛門

京二條通寺町西へ入町正本屋山本九兵衛版

是非もなし。御回向頼み奉る親の歎きが目

